

祇園社は下河原を南面とし、鳥居は石柱にして、感神院といふ豎額あり、照高院道晃親王の筆なり。西南の樓門には御隨身います。神殿の中央は大政所〔牛頭天王、素盞鳴垂跡〕東の間は八王子〔二女五男〕西の間は〔稲田姫、本御前〕抑祇園牛頭天皇を愛宕郡八坂郷感神院に勧請せし濫觴は、聖武天皇の御宇天平五年三月十八日、吉備大臣唐土より帰朝の時、播磨国広峯に垂跡し給ふを崇奉れり。其後常住寺の十禅師円如上人に神託あつて、帝城守護の為貞観十一年に遷座し給ふなり。中臣菟抄に曰、清和天皇貞観十八年、疫神崇をなして世の人疾に悩むこと以の外なり、曩祖日良曆洛中の男女を将て、六月七日十四日疫神を神泉苑に送る、しかりしより年々かたの如くしつけて、祇園会といふなり。神輿を置所をば八坂郷感神院といふ寺なれば、神殿もなきほどに、昭宣公の御殿をまるらせられて神殿とす、祇園は尋常の殿舎造りなり、是を精舎といふ、後人又祇園の名を加へけり。〔続古事談に曰〕祇園の宝殿の中には龍穴ありとなん、延久の頃梨本の座主〔天台梶井御門主〕其深さをはからんとせられければ、五十丈におよびてなほ底なしとぞ。美御前は素盞鳴の御子なり、後見殿は大己貴命と申、其外撰社末社は凶画に見えたり、元山大師は神殿東の庇の間にありしが、安永七年絵馬堂の西にうつす。〔日本略記に曰、天延元年五月七日以祇園為天台別院〕

薬師堂は観慶寺と号す、本尊は薬師如来、作は伝教大師なり、陽成院の勅願所として開基は円如上人といふ。〔当寺の鐘樓に撞木なし〕

祇園御霊会六月七日十四日、山鉾の行粧祭礼の礼式、其外五月廿九日六月十八日の神輿洗ひ等、世の知る所なれば委く

記するに及ず。凡洛陽らくぎやうの祭礼多しといへど、此会は殊に奇觀のかずくしければ、皆く見つくす人稀なり。臨時祭は近年三月十五日に執行あるなり。〔古は六月十五日にして、走馬勅楽東遊御幣かんじんあみを感神院かんじんゐんに奉らるよし、日本略記に見えたり〕

けづりかけの神事は、元朝寅の刻なり、天下安全の御祈禱なり。